

サイエンスカフェの概要について（事後報告）

1. 開催日時：令和 8 年 7 月 30 日（木）18:30～19:30
2. 開催場所：北海道大学工学部 フロンティア応用科学研究棟 1 階「SDGs オアシス」
（札幌市北区北 1 5 条西 8 丁目）
3. 関係団体等：北海道大学、日本学術会議北海道地区会議
4. 役割
講 師：野田 五十樹（北海道大学大学院情報科学研究院 教授／ 理化学研究所 客員
主管研究員／ 産業技術総合研究所 招聘研究員）
司会（聞き手）：有村 博紀（日本学術会議会員、北海道大学大学院情報科学研究院 教授）
支 援：宇山智彦（日本学術会議第一部会員・北海道地区会議代表幹事、北海道大学ス
ラブ・ユーラシア研究センター教授）、難波江有三（日本学術会議地方連絡委
員、北海道大学研究推進部研究振興企画課係長）

5. 概要

題目：AI から社会サービスへー AI シミュレーションによるサービス設計ー

概要：

AI は公共交通など社会サービスの改善に有用です。特に、多数の小さな AI を仮想空間で行動させる「マルチエージェント社会シミュレーション」は、人間社会の模倣や未来の社会システム設計に活用されています。今回のサイエンスカフェでは、北海道大学大学院情報科学研究院の野田五十樹教授を講師に迎え、本技術について解説いただきました。講演は、野田教授らが 30 年以上前に立ち上げ、現在では世界的なロボットサッカー競技へと成長した「ロボカップ」の紹介から始まり、競技の映像などを交えつつ、本技術の基本原則や従来技術との違いが分かりやすく説明されました。さらに応用例として、感染症の伝搬や災害避難、乗り合いタクシーなどの具体的な事例が示されました。質疑応答では、「AI 研究者がロボット競技を創設した理由」「サッカー競技と感染症伝搬の関連性」「AI の思考と人間の意思決定の関係」など、対面とオンラインの参加者双方から多岐にわたる質問が寄せられました。司会・支援者の有村教授や宇山教授を交えて、参加者と野田教授との活発な応答が行われ、盛況のうちに閉会しました。

6. 参加人数：32 名（内訳：会場参加 9 名、オンライン参加 23 名）

講演者：1 名

その他の参加者：3 名

7. 特記事項：

本サイエンスカフェは北海道大学工学部の「SDGs オアシス」において、研究者と一般参加者が気軽に交流できる開放的な雰囲気の中で開催されました。冒頭、司会の有村教授から、サイエンスカフェを通じて、科学と社会の将来像を考えて議論することの重要性が提示されました。事前にとられた参加申込者アンケート（回答 44 名）では、居

住地は札幌市内が5割弱、道内他地域が約2割、道外が約3割と広域にわたりました。年齢層は40～60代（約6割）を中心に、20-30代が約2.5割と70代以上が約1割と幅広く、トピックへの関心はAI（約8割）、シミュレーション（5割）、公共サービス（4.5割）が上位でした。今回、対面とオンラインの併用形式を新たに試みたことは、北海道の広大な地域特性による参加の障壁を下げ、多様性を確保する上で有効に働いたと思います。質問数も両形式で同等に活発で、登録・参加時の障害に関する問合せも少なく、参加者のオンラインリテラシーの高さを感じました。今後も多様な形式と通信路を活用して、科学と社会の対話機会を広げる努力が重要だと考えました。



講演する野田教授(右)と司会者の有村教授(左)



講演を聞く参加者の様子